

特に雑穀を中心とした展開を、ここの大学の協力をいただきながら、現実に進めています。雑穀は今、温泉の食事などで提供しています。

また企業の話ですが、実はホンダが山を何とかしようと小菅に入ってきています。企業の森づくりということで、ホンダの森づくりをホンダのお金でやっています。もう一つ、JTが去年から環境の森をつくるということで、やはり森林の整備をしようと活動し始めています。ということで、小菅の方にそれだけ企業が参画し始めていただいています。大変有難い話です。

これは百年の森づくりの一環で、一般の方々が山に調査に行くと、樹幹投影図と言うんですけど木の位置全部を測ってきてもらって、それを図面に書いて勉強します。この人たちは二度三度参加すると、ある程度、次の人に教えられるような案内人になってもらいます。ほとんど東京の人が参加してくれています。

そんなことで、森林再生、文化再生、源流・景観再生といった大きな目標の中で、色々な事業を行なっています。これも下流の方々に運営委員として入っていただいて、活動をしています。

それから森林に入るエコセラピーというのが流行りになっていますが、昨年、遊歩道を2km新しく作りました。小菅村の中にエコセラピー研究会というのがありまして、その人たちと一緒に、下流から来た人たちに一緒に山を回りながら案内をするというような活動もしています。

ということで、企業が参画してきた関係で私共も色々取り組みが進んできています。流域の人たちと一体的な、流域全体で源流を守ってってもらいたいということで、源流域と環境で捉えた企業が参画して、まだ思考中なのですが、源流通貨といって、環境で通貨を回していこうという考え方もあります。

最後にもう一点だけお話をさせていただきたいですが、源流大学構想というものを、考えております。この付近の東京エリアの大学にコンソーシアムを組んでいただき、小菅村の全域をフィールドとした源流大学としてカリキュラムを作っていただいて、小菅へ行けば単位が取得できるというような構想を、木俣先生を中心とし、他の大学の先生方と色々研究しているところです。うまくいけば、何とか小さなところから大学のフィールドとして、源流大学作っていきたい。これが成功すれば、先程お話しした全国源流の郷協議会の中の他のエリアに、源流を守る一つの手段として示せるのではないかと考えています。

というわけで、こんなことでむらづくりをしているわ

けでございます。

後何年、小菅村があるかわかりません。実はあと5年くらいしかないのかもしれませんが、私達の地域を下流の人々のお力をお借りし守って行きたいと思っています。今後ともお力添えよろしく願いまして、発表に替えさせていただきます。ありがとうございます。(会場、拍手)

<講師プロフィール>

青柳 諭 (あおやぎさとし)

山梨県 小菅村 源流振興課長

1955年3月31日生まれ。法政大学土木工学課卒業後、小菅村役場に勤める。平成12年7月より振興課長（現在は源流振興課長）。小菅村と都市農村の交流を進める担当として多摩源流をキーワードに活動を行っている。

報告2

「多摩ニュータウン・オアシスの 新たな公園管理スタイル」



内野 秀重氏

八王子市長池公園自然館 副館長

長池公園から参りました、内野と申します。よろしくお願ひします。私自身は立川で生まれ育ちまして、小学校高学年の時に朝一時間くらい多摩川で釣りをしてから学校に行くというような生活をしてきた記憶があります。ですから、今日このような多摩川に関するフォーラムの場でお話をさせて頂けることを大変光栄に思います。さきほど小菅村のダイナミックな自然を見せていただいてうらやましく思いましたけれども、私の話は、多摩川の一支流の源流にも、こんな自然の豊かな場所があるんだというようなお話をさせていただければと思っております。

長池公園という所は、八王子市の南の端、もう、すぐ南側が町田市というようなところにあります。多摩丘陵はI面、II面とで高低差がありますが、その高い方のI面に位置してございまして、標高が大体100mちょっと超えています。水系で言いますと、ちょうど多摩市内で多摩川に合流している大栗川、その川を遡った

ところにさらに別所川という支流があり、その水源にあたるエリアがこの長池公園のある場所です。広さは20ha、大体、東京ドームの4.4個分です。多摩ニュータウンは大変広いですが、その中のB-4地区というエリアの緑の拠点としての位置づけで、都市基盤整備公団（現都市再生機構）が整備し、八王子市に引き継がれ、現在は私ども「フュージョン長池公園」が指定管理者として管理を受託しています。地図で言いますとこの辺が長池公園です。調布駅から京王相模原線が橋本にのびていますが、途中、京王堀之内、南大沢といった駅があります。これらの駅から1～1.5km南東方向です。ちなみに東側が多摩丘陵の尾根で町田市との境界となっていて、里山が大規模に残る鶴見川流域の小山田地区が背中合わせとなっています。多摩ニュータウン側では、大規模に造成が行われた中でこの一角だけ、長池公園において原地形が残されているわけです。

長池公園の自然を紹介いたしますと、長池源流部に環境省に指定された特定植物群落のハンノキ林があります。面積は900㎡ぐらいで狭いのですが、その林床を湧水が流れていて長池に流入しています。そこにはミドリシジミというハンノキに特徴的な蝶が生息していたり、現在では高標高湿地でないと思えないサワギキョウやオオニガナ、あるいはノハナショウブなどの湿生植物が見られます。こうした植物は氷河期から地球が暖かくなったときに標高の高い場所に逃げ込みそこなった植物群と考えられていて、そうしたものを含むハンノキ林として重要性が特定植物群落に指定された理由です。結局、このことが決めるの一つとなって、多摩ニュータウンの中に、このような自然地形が残存することになったのでしょう。さらに遡れば、昭和30年代に植物学者の本田正次先生が多摩地域の自然環境の調査を実施し、都内の善福寺の湿生植物群に次ぐ貴重な場所だという報告を東京都に提出され、その後、地元の八王子自然友の会が請願なり、陳情してきたことも布石となって効を奏したに違いありません。

これは先ほど申しました長池と築池の風景です。こちら長池のほうが源流にあたりますが水深は浅いです。奥の方にハンノキ林があってこれを取り囲むエリアがいわゆるサンクチュアリになっていて、通常、一般の方は立ち入りできず、研究や視察団体に対応してのみ立ち入りできるということになっております。その下方に築池がありまして、かつてどちらの池も農業用水に使われていたのですが、通常は築池の方を使い、湧水のときにやむを得ず長池の水を降ろしてい

たようで、長池の方が、より神格化した扱いを受けていました。江戸時代に書かれた新編武蔵風土記には、「八王子由木村にある長池はヌナワ（ジュンサイ）、コウホネ、などが密生していた」という記録があります。他にもヒツジグサなどの水生植物も豊かに生えており、これらは1962年頃までは見られたそうです。この頃、非常に大きな湧水があって池の水を全て降ろしたという記録がありまして、それ以後、水生植物が一つも見られなくなったのだそうです。しかし、それがなぜなのかは良く分かっていません。一つには、現在ではウシガエルやアメリカザリガニなどの外来生物が多く生息しているので、水生植物を食べつくしたのではということが挙げられます。また、かつて米軍が水生植物を失くすために薬を入れたなんていう噂もありますが、真意は定かではありません。というような経緯はありますが、現在では池をつなぐ水路や、ボランティアが手入れしている田んぼ、また多くの小さな池があったりと、水辺の多様性は非常に豊かです。一方、雑木林も広範囲に広がっていて、昆虫類の生息状況も非常に豊かです。例えば、虫の好きな方はお分かりになると思いますが、蝶類でゼフィルスというシジミチョウの一群がいますが、20ha程度の公園で6種類もゼフィルスが生息していることは非常に環境の多様性を誇れることだと思っております。雑木林は落葉樹の構成比率が高く、アオキやシラカシなどの常緑樹は数えるほどです。コナラの年齢は50年を過ぎるものが多いのですが、元々は薪炭材などに利用され繰り返し再生産されてきた林だろうと思われまふ。そのように収奪を繰り返してきた林だからかどうかはわかりませんが、林床は放置されてきアズマネザサが相当に生えていて、刈っても刈ってもなかなか多様な植物相というのが戻ってきません。豊富な昆虫相と比べると林床の植物相は貧困と言えるかもしれません。ただ水辺と樹林との関係で言いますと、バランスがうまく保たれた環境と言えると思います。

次に管理のことについてお話しようと思ひます。長池公園は八王子市が持っている公園です。指定管理者制度というのをここ数年皆さんも聞いたことがあると思ひますが、公的な施設を、公的な団体のみならず、適性のある民間団体などが管理できる国の制度で、それが八王子市にも施行されました。長池公園は、市内で初めてその制度が施行されたところで、3年間、私たち「フュージョン長池公園」に管理運営が委託がされました。この「フュージョン長池公園」ですが、実は3つの団体の連合体です。1つに「NPOフュージョン長池」

という組織がありまして、多摩ニュータウン地域のくらしに基づく色々な問題や悩みの解決に対応している団体です。そもそも多摩ニュータウンはいろんな出身地の方が住んでいるのでくらしの相談事が多く、例えば、団地の一部が壊れてしまったけれどどうしようとか、高齢になって高い階から住み替えたいがどうすればよいか、他にも子育ての悩みとか、そういったことに対応し人々の間の潤滑油のような役割をしてきた団体です。いわば人々との交流を作り出すのが得意な団体と言えます。このNPOが代表団体となっていますが、公園を管理するには専門的な仕事が必要となってきましたので、やはりそれだけでは足りません。株式会社富士植木という造園業界の中では老舗の企業がありまして、高度に専門的、あるいは機動力の必要な業務を受け持っています。それから私が所属している株式会社PLACEがあります。自然環境の調査や計画、環境教育のプランニングなどを行なっている事務所でして、植生の管理や動植物の保全、環境計画などの企画運営を担当しています。この3つの団体が合同体として、平成18年の4月から長池公園を管理運営しているわけです。NPOが入って公園を管理するという事は八王子市ではもちろん初めての試みですし、東京都でも狭山丘陵にあります公園でNPOが躍進しているものの、まだまだ少ない事例です。

我々の公園管理にどんな特徴があるかと言いますと、まず直営の植生管理ということが挙げられます。大体草刈りというと専門業者さんに委託することが多いかと思いますが、我々の場合、常駐のスタッフが平日で2、3人いて、彼らが草刈りや様々な手入れを行なってしまいます。また、一気にやり上げてしまわなければならないように機動力の必要な広場の芝刈りや機械力の必要な作業などは、先程申し上げました株式会社富士植木が専門的に請け負うという分担でやっています。固定的な作業員による「顔の見える緑の管理」ということが、この長池公園では可能になっています。

2つめには生物多様性に最大限配慮していることが挙げられます。そもそもこの公園が多摩ニュータウンの中で唯一、手を着けられなかった場所で、植物も650種類を数えるような種の宝庫と言えます。ですが利用者にとっては快適性も望まれるわけですし、その快適性と動植物保護との間でぎりぎりの調整を行なうことに苦労しています。これを根拠として貴重動植物の保護、育成ということも積極的に行なっております。先程ふれましたハンノキ林のノハナショウブは昨年初めて花をつけましたので、種子を採取することにより増

殖計画を進めています。同じく貴重なサワギキョウについても、10数株だったところが、暗い場所ではうまく育たないので明るい場所へ移植したところ、たくさん種子をつけ、第2世代が花をつけるにいたっています。また外来生物の積極的なコントロールというのも色々やっております、セイタカアワダチソウ、オオブタクサなどを手作業で抜き取り、徹底的に抑えつけるようなこともやっております。

それから3つめの特徴としては、色々な意味でNPOが主体となっている管理をしていることから、地域の協働精神、主体的な参加意欲の上に仕事が成り立っているということが挙げられるでしょう。スタッフはたいへんに献身的に業務をやってくれておりまして、実に多様な公園管理業務に対して、経験を活かし、また工夫を凝らし、実際にお支払いしている手当の2倍～3倍の仕事をしてきているといっても過言ではありません。それだけ能力の高いスタッフが集められたということも言えます。あるいはまた、金銭的にはお金はいらないというシニアのボランティアが、日々、動植物の世話をしてくれていたり、授産施設の方の活動として刈った草の集草を通常より低い金額で請け負っていただくなど、ボランティアをはじめ、多様なスタイルでこの公園を維持しているという状況があります。

例えば専属のスタッフでどんな管理をやっているかと言いますと、先程2つの池を紹介しましたが、さらに下にもう1つ、ほとんど人工的な、子どもが裸足で入れるような池があります。この周りの芝生をこれまでは一斉に年数回刈っていましたが、その3分の1の範囲については中間期の草刈りを保留しました。背の高さの違う草地を残してバッタが生息できるように、また、ムラサキツメクサなど野草をしばらく楽しめる間は刈らないといったように、草地に多様な価値を見だし、回数制限をすることで環境の多様性を図っています。どうしてこの作業を行なうのかということ、来園者にわかるよう、きちんと広報しながらやることも大切です。こちらが、授産施設との連携による集草作業の状況です。さすがに彼らにエンジン草刈り機を使ってもらうのは困難ですので、我々専門スタッフが刈った草を施設の通所生が集めるという分業の形です。まだまだ始めたばかりの試行的な取り組みですが、草を集める、あるいは堆肥を切り返すといった作業は、彼らの個々の能力やペースに合わせてできる仕事として適性があると思います。ただ、こちらで草を刈ったけれどもなかなかすみやかに作業に移れなかったりという部分は、課題として残っています。

それから常駐スタッフによる植生管理の例ですが、公園を完成させる間にかなり長い間閉鎖されていたことから、林床はアズマネザサに覆われ、刈っても刈っても減らないといった状況があり、刈ったササの処分も一苦勞です。ササをヘッジ替わりに利用したり、フェンス替わりに仕立てたり、工夫しています。あるいは大面積を草刈りして、それを一箇所に集めてしまうとそのストックだけで膨大な量になってしまうので、山の植林地のように筋状に寝かしたりと、いろんなことを試みています。この写真は竹を使っているビオトープ、つまり昆虫の棲み処を作っているところです。長池公園にはカミキリムシ類が非常に豊かなのですが、竹には色々なカミキリや蜂なんかが集まるということ、さらに里山の景観を創出するという意味から、こういったものを作っています。長池公園には、竹林がまったく無く、各地で竹の処理に困っている状況が逆にうらやましいところです。次にこの写真ですが、セイタカアワダチソウを選択的に抜き取っているところです。これは今でも続けていますが、いわゆる普通の草刈りの業者さんではできない仕事です。この草の中からどれを残してどれを抜き取るかということを我々スタッフが明確に理解していないと務まらない作業です。これがオオトラノオ、こちらはオオブタクサ、これはセイタカアワダチソウということで、オオブタクサとセイタカアワダチソウはどんどん抜いています。ヨモギは最後に刈り払い機で刈ってしまいます。全部一斉に刈り払い機で刈ってしまえばいいのではと思われるかもしれませんが、セイタカアワダチソウの地上部を刈っても、地下茎が残ってしまい、逆に増殖を助長してしまうのです。ですからできるだけ手抜き除草をしています。そのためか、この写真のように今年はオオトラノオの生育が非常に良くてたくさん花をつけるようになりました。セイタカアワダチソウは、まだ小さい、このような状態の時に1本1本抜いていきます。この時期であれば地下茎が多少ちぎれてしまうこともありますが、抜いていくことが簡単です。それからオオブタクサですね。背丈が3mにも4mにもなりますが、これが水辺環境に定着し、大雨の時に種が流れて広がっていきます。この草も今一生懸命抜いているところです。実はこの草、茎の中にある白い髓で遊ぶことができるので、退治しながら利用するというのもやっています。いずれにせよ、放置するとバイオマスが多量に発生し、見苦しくもあるので常にコントロールしている植物です。さらにこのアレチウリ、これは特定外来生物に指定されていますね。タケノコのように1日で1mくらい伸びてしま

う生物です。これも実は長池公園に入ってしまったいて、一本も残さないようにという意気込みで現在、駆除をしている状況です。撲滅には1本でも残したら種子を残されてしまうので、根気のいる徹底的な作業が必要です。専属スタッフがいることでないとなかなかできないこだわった植生管理の例です。

ところで、この公園の特徴と言えらると思えますが、公園内の体験ゾーンエリアを、長池里山クラブという団体にお任せしています。この団体は公園ができたときに、公団や行政が育ててきたボランティアクラブで、会員組織で年間通して里山保全活動をしている団体です。全体としては百名近い参加者がいます。月1回の定例活動というのがあって、それに加え自主活動もあります。かなり忙しく活動していきまして、稲作、畑作、雑木林の管理、炭焼きなどを、年間の季節サイクルでまわしてこなしています。これは田植えの風景ですね。田んぼが三枚ありまして、このように多摩ニュータウンの子供たちが裸足で泥だらけになって田植えをしています。彼らはもちろんそんな経験ありませんので、とにかく土に触れてもらうことが貴重な体験です。1本でも2本でも自分で苗を植えるということを子ども達にはやらせてもらっています。それからボランティア活動をするにあたって拠点というのが、あるとないのでは活動の幅が随分違うと思いますが、立派な作業小屋があります。作業小屋といっても、土間あり、各種道具あり、トイレありと、雨がしのげるだけでなく、煮炊きができ、他にも水車小屋があったりと、大変恵まれた施設環境となっています。

自主的なボランティアではなく、公園が主体となった環境教育活動もあります。その1つにサンクチュアリワークスクールというのがあります。先程長池の周りに入れないエリアになっていると言いましたが、その中に入って自然観察や植生管理なんかをしています。目的としては、サンクチュアリ(4ha)といっても管理が必要ですのでそれを行っていくこと、サンクチュアリに定期的に入ることでどんな動植物がどんな時期に現れるのかを観察していくこと、さらに、こうした活動によってボランティアシップの養成あるいは市民リーダーを育成することの3つが挙げられます。これはササが伸びすぎてしまっているの、それを刈ったところの植生調査をしてどんな植物が芽生えているのか調べている状況です。こちらは、最源流部にジャヤナギという柳が1本倒れ掛かって埋もれてしまったところ、草刈りをして再生を試みているところです。希少植物について学習する機会も多いです。水辺の多い環境なので、

カヤツリグサ科の珍しい植物も多いんですね。その中のこれはウキヤガラという植物を観察しています。もう1つの自主的な事業に、今年から始めたネイチャー・イベント・デー活動があります。自然観察やワークショップをやったりと、定例の第1土曜日に活動しています。その枠組みの中で、キッズ対象のネイチャーワークショップというのを特に力を入れて連続してやっています。大体小学3、4年生を対象として、自然の中に連れ出し、わんぱく少年を育てようという活動です。これは、植物に親しませるにはどうしたらいいかということで、草遊びの専門家をお招きして、公園にある身近な植物を使って植物と親しむ活動をしている様子です。子どもに植物といっても、とっつきにくいところがあるんですが、草を使って音を出したり、おもちゃを作ったり、ちょっとした工夫で遊びが可能であることがわかると楽しいんですね。イタドリの茎で笛を作ったり、そういった五感を使った遊びをうまく展開すると、子供たちもとても積極的に飽きずに遊んでいます。簡単なものだけでなく、シュロの葉を使って難しい馬を作ったり、カタツムリを作ったりと、集中して取り組んでいる様子を見ていますと、やはり興味の引き込み方を上手にやれば、子ども達はついてくるということがよくわかります。また、子ども達は虫を観察するのは非常に好きでして、先日は、昆虫の写真家をお招きして、公園を歩きながら見つけた虫について色々解説してもらいました。ところが、先生が見つける前に子供たちがいろんな虫を見つけてくるものですから解説が追いつかないというような状況で、驚きました。ベニカミキリとこれが先程のゼフィルスの一種ウラナミアカシジミです。環境学習活動としては今のサンクチュアリの活動とネイチャー・イベント・デーの活動に力を入れていますけれども、課題としてあるのは、池の中にすみついてしまったブラックバス、あるいはウシガエルといったトンボや小魚の敵である外来種をどのように駆除していくかということがあります。もっと小魚の天国にして、子どもが雑魚釣りができるような場所になればいいなと思っているのですが、そういう対策をこれから時間をかけて練っていこうと考えています。あるいは近隣小学校で蚕を育てることが教育に取り入れられていますが、校内に桑の木がなく、長池公園に葉を採取に来られます。もちろん結構なのですが、蚕を学校で飼うのは今さら始まったことではないのに、どうして校庭に桑の木がないのだろうとちょっと不思議です。だったらここの苗木を学校に植えてください。それもあげますからっていうところまでやってあげられたらいい

いと思っています。つまり、学校教育でやりきれない部分について長池公園というフィールドを使ってもらったり、あるいは私たちが環境教育のお手伝いをするというそういう分担が良いのかなと思っています。

ただ、環境教育的な活動については人材もまだまだ不足しています。もしかすると学芸大のみなさんの研究フィールドとしても、有効にいろんなことが活かせることがあると思いますので、ぜひまた機会がありましたら、長池公園に来ていただき、連携して何かができればと思います。今日は長時間、おつきあいいただき、ありがとうございました。(会場、拍手)

<講師プロフィール>

内野秀重 (うちのひでしげ)

八王子市 長池公園自然館 副館長

1959年東京都出身。東京農業大学農学部卒。町田市役所を経て、(株)プレイス研究員。この4月より、多摩NTの緑の拠点、長池公園の副館長に従事。昨年秋、NHK趣味悠々「はじめての里山歩き」の企画・出演を担当。八王子市環境審議委員。町田市文化財保護審議委員。

関連団体：野津田・雑木林の会

報告3

「みどりのカラーマップと田んぼの時間」



平井正風氏

小金井市環境市民会議

小金井市環境市民会議の平井と申します。まず、緑マップの作成についてご紹介します。私共の市民会議というのはこの小金井の地域に限られた、今までのお話から比べますとちょっと狭い範囲で、活動の内容もそれほど大規模なものではございませんが、田んぼの時間と合わせて環境学習の一環あるいは市民ができる環境活動の一例としてご紹介させていただきます。まず前半、私の方から緑のカラーマップの説明をした後で、早崎さんの方から田んぼの時間の説明をさせていただきたいと思います。

それでは早速、緑のマップ作成の説明をさせていた